ここが知りたい×あれが聞きたい

イメージと色の意外な関係

色彩の「初学者」による色彩構成から

様々な分野の第一線で活躍するスペシャリストに、読者に代わってインタビューする当コーナー。今回は、「初学者（これから色彩を学ぶ、いわば色彩ビギナー）」の色彩構成を研究されている森友令子先生に、初学者が匂いから得たイメージを色で表現するとどうなるのか、イメージと色の意外な関係について伺いました。

Q これから色彩を学ぶ「初学者」の色彩構成を研究されているそうですね。

デザインや芸術分野の人たちにとって色彩は興味対象かもしれません。しかし、一般の人たちはどうでしょうか。全く興味がない、意識すらしたことがない、という人が大半なのではないでしょうか。ただし、恋愛や就職活動など、人の心が絡んだ話での色彩については興味津々のようで、関連書籍もたくさんあります。そこで、色彩をこれから学ぶ初学者、特に、デザインや芸術とは関係なく、ただ単に色彩に興味があるとか、選択授業のひとつとして色彩を学ぶことになった人がイメージする色や配色はどのようなものなのだろうかというのが、「色彩構成にみる色とイメージの実際」という研究です。

Q この研究をされるきっかけは何だったのですか。

以前、別の研究で、「日本人は教えられなくても、日本の文化、日本の心を持っている」「わざわざ日本文化を学ぶ必要などない。ちゃんと受け継がれている」という声をよく耳にしたのですが、授業などで若者たちと接していると、本当にそうなのか？と感じていました。実際、初学者を対象にした「日本の四季の色とイメージ」の研究では、春は桜（ピンク）、夏は海（青）、秋は紅葉（赤）、冬はクリスマス（赤と緑、もしくは、大人のクリスマスというイメージでの青と白）と、まるで型にはまったような色彩構成が続出しました。型が悪いとは言いませんが、日本の風物詩はそれだけではありません。これは日本の色彩文化のみならず、日本文化の衰退を象徴しているのではないかと思いました。

Q 初学者が色彩構成をする場合、どのような心理が働くのでしょうか。

初学者における色彩心理は、感情的印象に対しても、知的印象（視覚的印象、触覚的印象など）に対しても、学習以前では、無意識的であれ意識的であれ「個人的な」印象に強く作用されていると想定できます。この「個人的な」印象は、家庭環境はもとより、漫画、雑誌、ネット、携帯、アニメーション、テレビ、ゲームなど、多くのメディアの影響を強く受けていると考えられます。

Q どのような実験を行ったのですか。研究方法を教えてください。

対象は、ある高校の3年生1クラスで生徒は女子30名です。色彩に関する知識は、他教科やテレビ、雑誌などから得た程度で、色は「好き」「嫌い」、もしくは「無難」「苦手」などで判断していました。漫画やアニメにはある程度の興味を持っていましたが、芸術や日本文化には、ほとんどの生徒が興味がないようでした。

手掛かりとなる「イメージ」は、「匂い」としました。色彩構成は、B5サイズの用紙1枚にトーナルカラー48色（PCCSに基づいて選ばれた印刷いろがみ）を使用しました。色に重きを置くために抽象的表現とし、色数は白と黒を含めずに最低7色としました。初学者だからこそ自由な発想をしてくれるのではないかと考え、事前に色彩調和理論や、色彩言語、色彩イメージなどの説明は行いませんでした。

Q どんな匂いを嗅いでもらったのですか。

ピュアフルーツ（以下PF）とレモングラス（以下LG）、2種類のフレグランスオイルを用意し、それぞれクラスの半数ずつに嗅いでもらいました。

なぜ匂いにしたかというと、商業や工業において、何らかの形で匂い（もしくは味）を対象とする場合、色彩は機能的役割、情緒的効果を期待され、重要な役割を担うことになるからです。嗅覚や味覚を色彩で表現する場合も、その多くが、実際の匂いや味の元となるモノに基づいていることは、実際の商業製品や工業製品から推察できるでしょう。

Q 匂いを嗅いで生徒たちはどのようなイメージを抱いたのでしょう。

実は匂いのイメージを色に置き換える前に、まず言葉で表現してもらいました。初学者にとっては、色よりも言葉の方が自由自在に使いこなすことができると考えたからです。匂いの特徴的な言葉として一番多く挙がったのは、PFでは「甘い」、LGでは「レモン」でした。共に感情的印象ではなく知的印象です。しかし、それだけではなく、PFでは「懐かしい、優しい、やわらかい」、LGでは「痛い、酔いそう、過干渉」など、様々な感情的印象を挙げていました。

Profile

森友 令子（もりとも れいこ） 先生

大阪国際大学 グローバルビジネス学部グローバルビジネス学科講師。
博士（芸術工学／神戸芸術工科大学大学院）。
主な研究：初学者における日本の四季の色のイメージと形の関連性、初学者における色彩配色にみる源氏物語、『白蛇伝』と『白雪姫』の背景描写にみるファンタジーの描かれ方、“描写するまなざし”と“複製する視線”の分析、「調目法」への考察、3DCGアニメーション作品における「線」に関する考察・線の消失／線の存在意義、等。

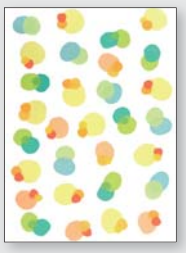
PFでの色彩構成例

【例1】
様々な色が出現。

【例2】
共に言葉の表現は「甘い」だが、右は「さわやか」、左は「きつい」「いちご」という言葉を挙げている。

LGでの色彩構成例

【例3】
やまぶき、きいろなどの組み合わせが多い。



【例4】
同じみどりでも言葉の表現は「痛い」（右）と「爽やか」で異なる。

【例5】
右の言葉の表現は「レモン」や「ライム」「さわやか」「すっきり」だが、左は「過干渉」「痛い」「物足りない」。

Q 言葉で表現することで色彩構成がしやすくなるのですね。結果はいかがでしたか。

PFでの、最多出現色はピンクとあかむらさきでした。しかし、一緒に使っている作品は3点しかなく、多くの場合、どちらかの色しか使用していませんでした。また、同じ匂いを嗅いだとは思えないほど、様々な色が出現していました【例1】。

言葉の表現も合わせて考察すると、同じ「甘い」の作品でも、2番目に挙げた言葉が「さわやか」と、「きつい」「いちご」では異なった印象になっています【例2】。

一方、LGの場合、やまぶき、きいろ、ひわいろ、ひまわりの組み合わせが多く見られました【例3】。

LGの基調と考えられる色は類似色の範囲内ですが、アクセントと考えられる色がそれぞれ異なっています。しかも、同じ色で印象の言葉が異なっています。例えば、みどりは「痛い」と「爽やか」で出現しています【例4・5】。

Q こうした結果からどのようなことが読みとれますか。

この研究では、甘い系の匂い（PF）と柑橘系の匂い（LG）を選択しました。これは、甘い系は「甘い」という知的印象から赤系統を、柑橘系は「爽やか」という感情的印象から黄もしくは緑系統を、2方向にくっきりとわかれるであろうと予想したからです。しかし、実際には予想を大きくはずれ、思いもよらない色彩構成を見ることとなりました。言葉の印象では予想通りと言えたのですが、PFの色彩構成はいい意味で裏切られました。初学者の場合、「甘い」や「レモン」といった知的印象が、他の知的印象や、感情的印象と組み合わさると多種多様な色彩構成になるということがわかりました。

Q この研究を通して森友先生が伝えたいことは何ですか。

初学者には「色に対する自由さ」があるのではないかと考えます。この「自由さ」は、好き勝手し放題ということではありません。嗜好色による色の偏りも見受けられません。与えられたテーマに対して、自分自身の体験や知識に基づいて、印象を色に起こしているので、似た作品もほとんどありません。色に関する知識があまりない状態だからこそ、思いもよらぬ色彩構成に出会うことができるのだと思います。もちろん、色が持つ様々な法則やルールは必要です。しかし、「色に対する自由さ」は、そのような知識を学んだ後においても発揮されるべき「感性」の1つなのではないでしょうか。

「色に対する自由さ」を、いかに失わずに秩序だてていけるかが、色彩教育、ひいては色彩環境に求められるのではないかと考えています。